



フィリピン・サンマニユエルの「八戸学院カーテル校」で日本語を学ぶ生徒 =6月(共同)

日本の働き手 アジアで育成

少子化で若い働き手が減る日本、若者は多いが仕事が少ないフィリピン。対照的な両国の課題を教育で改善しようと、青森県の学校法人がフィリピンで学校運営を始めた。人手不足の業種を対象に新たな在留資格を創設する日本政府の方針もにらみ、日本語を学んだ生徒が将来日本で働けるよう支援する。労働力不足と仕事不足を同時に解消しようという挑戦だ。

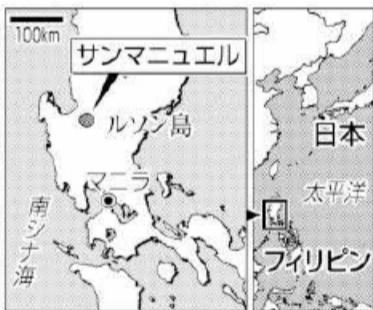
青森の法人フィリピンに学校

少子化、仕事不足 一挙解決へ



首都マニラから北に車で3時間。タルラック州サンマニユエルのどかな田園地帯に、中高一貫校「八戸学院カーテル校」がある。同じ場所で地元の教育財団が私立高を運営していたが、青森県八戸市の学校法人光星学院が財団側に出資し協定を締結。6月に新たな学校としてスタートした。

「私は…カイシャインです」そう、その調子!。真新しい教室をのぞくと元



気な声が聞こえてきた。生徒約30人に日本語を教えるのは島尻昌弥さん(29)。フィリピンの子はおしゃべり好きだから、語学の上達が早い」と話す。

同校では、日本語が必修で週3回授業があるほか、課外活動で柔道や書道など日本文化に触れられる。計約300人の生徒は卒業までに日本語能力試験で「基本的な日本語を理解することができ」水準のN4レベルを目指す。プログラミングも学ぶ。

光星学院の大谷真樹理事(57)によると、卒業生には日本で働き手が足りない介護やIT分野などへの就労を支援する。2020年度から日本の小学校で英語教育が本格導入されるのに伴い、不足が見込まれる英語教師も進路の一つという。

国連によると、15年の日本人の平均年齢46・3歳に比べ、フィリピン人は24・

1歳と若年層の多さが際立つ。「若者が少ない日本の地方都市では、自国で仕事がないフィリピンの若者が活躍する余地がある。互いの足りない部分を補い合えば、(共に利益を得る)ウインウインの関係になれる」。こう考えたのが学校開設のきっかけだ。

想定される課題もある。大谷さんは日本の受け入れ態勢を挙げ「外国人が日本の地方都市でどれだけ溶け込めるだろうか。孤立や亀裂を生じさせないため、地域住民と交流する機会や行政の後押しも必要」と指摘する。

人手不足の日本では今後、外国人労働者は増え続けるとみられる。「日本が労働力の外国人依存を避けられないなら、教育を武器に先手を打っていきたい」と大谷さん。「地方の私学は少子化で経営難に直面しているが、発想次第では地方から課題解決のモデルケースを提示できる」と意気込んでいる。(サンマニユエル共同)